

はぬるはうす



# 「沖浦和光著作集」第2巻『近代の文化変動と社会運動』

(現代書館、2017年7月刊行、本体価格4500円)

落合祥堯

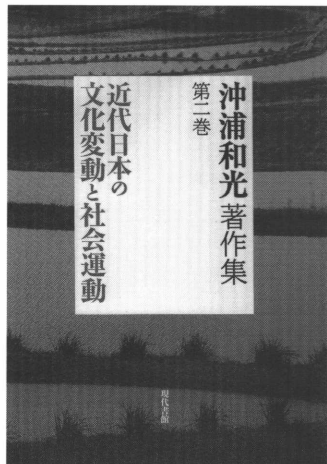
本書には、「近代日本の思想と社会運動」という、全体の3分の2近くを占める長い論文が収められている。ほかに、昭和初期の日本の共産主義運動に絶大な影響を与えた福本和夫の理論(福本イズム)と、1920年代のロシア革命の変質(スターリニズム)について考察した、比較的初期に書かれた2編が収録されている。だが、著者・沖浦さんの思想体系の中で重要なものは前者であると思われ、また私の関心もここにあるので、ここでは「近代日本の思想と社会運動」にしばって紹介したい。この論文は、全電通の学習誌に3年半にわたって連載され、1982年に新書版に

まとめられたものの再録である。当時私は、京都の出版社で、野間宏さんと沖浦和光さんの対談集『アジアの聖と賤』を編集中で、しばしば沖浦さんにお会いし、できたばかりのこの新書を直接いただいた思い出がある。この新書は今日ではなかなか手

に入らない。今回久しぶりに論文を再読し、いくつか感じた事柄を記したい。

沖浦さんの関心領域はとても広い。沖浦さんは、戦後の日本の文芸思潮やマルクス主義との格闘から始まり、ヨーロッパ近代への批判的考察を経て、インド体験をきっかけにアジア社会の混沌のはらむ可能性や、被差別民の歴史と文化を照らし出すという、文化史の中の未開拓の分野へと関心を深めていった。当然ながら、全国の農山漁村やアジアの国々のフィールド調査にかける機会も増えていったのである。

その後の沖浦さんは水を得た魚のように、被差別部落での聞き書き、遊芸民、漂



泊民の民俗への接近、身分制と差別意識、天皇制と貴賤の問題など、時代をさかのぼり、地域と職種を縦横に横断し、部落史学会に問題を投げかけ、差別構造の全体にわたって深層に光を当てていった。その業績は巨人のそれを思わせる。晩年には松本治一郎賞を受賞した。

部落の古老や、村落の被差別民衆に接する際の沖浦さんの態度はまことに真摯であり、相手への畏敬と想像力にとんでいた。私はこのような場に何度同席したかしかない。市民社会の浅い人間関係の中で生きてきた私にとって、このような場での濃密な人間のつながりは初めての経験であり、新しい人間認識が開かれるのを感じた。

この論文「近代日本の……」は、そのような著者の、前半生の関心領域から後半生の関心へと至る、中間点に位置するといえよう。

本論文は、明治前半の自由民権運動が敗北し、それに代わる新しい民衆運動が台頭してくる時代、黎明期日本の有名無名の活動家・知識人の人間像や出来事を追っている。明治藩閥政府の専制に対抗するキリス

ト者・社会主義者の先駆的活動、日露戦争下「平民社」の反戦活動、足尾鉍毒の公害反対の農民運動、工場や鉍山でのストライキと労働運動の前進、大逆事件と「冬の時代」、米騒動、水平社の結成、大正デモクラシーなどなど、明治から大正にかけて日本社会は自由・平和・生活の向上を求める民衆のエネルギが噴出した時代だった。

沖浦さんは新しい世界を求める民衆の自発的な運動が次々に生まれたこの時代の熱気を情熱的に語っている。日本の近代は民衆の下からの運動によって内容豊かなものになったこと、それは、富国・強兵を唱える上からの近代化とは対照的であること、そのために払った先人たちの努力を私たちは忘れてはならないだろう。しかし同時に、明治33年の治安警察法と、大逆事件を頂点とする治安弾圧によって民衆の運動は逼塞を余儀なくされたこと、民衆は国権が煽る排外的ナシヨナリズムに次第に巻き込まれていったこと、そして、その延長として起こった日韓併合や、昭和の大陸侵略、太平洋戦争を労働大衆は阻止できず、アジア民衆への暴虐と国の滅亡を招いた歴史も

忘れてはならないのである。

最近、「長州レジーム」という言葉を耳にする。明治維新は封建制を倒し、日本の歴史を進歩させたという説明が常識になっているが、この解釈は小さいときからの教育によって私たちに植えつけられたウソの教えだというのだ。実際は、250年の平和とすぐれた文化を生み出し、大政奉還によって公議輿論による新しい立憲政治を目指す徳川政権を薩長勢力が強引に武力で倒し、有司専制で要職を独占し、天皇を神聖化し、人民を政治から遠ざけて帝国憲法体制を作り上げ、その結果生まれた軍国主義が民衆を不幸のどん底に追いこんだというのである。このような歴史観に立てば、明治維新は日本近代の負の歴史の出発点なのだ。

私には、現政権の唱える改憲の先にあるもの、「美しい日本」「日本を取り戻す」とは、戦前の長州レジームに再び回帰せよと言っているように聞こえる。本書に登場する幾多の主人公が闘った相手は、まさに長州レジームだったといえよう（西郷、大久保が相次いで倒れ、伊藤博文、山縣有朋らの長州勢

が権力を握ったことは否定できない)。この言葉はまだ一般化しておらず、近代史の定説ではないが、このように補助線を引くと、著者が強調している明治・大正の時代の特質がよりはつきりと見えてくるように思えるのである。

本書は、天皇の臣民であることや、排外的ナショナリズムの渦に巻き込まれることを拒否し、自分を一個の独立した人間として、まっとうに働く農民や職人や労働者、市民として、政府や資本の圧政に対して声を挙げた人たちの生き生きとした姿を私たちに伝えてくれる。

社会主義伝道行商でリヤカーを引いて全

国を回った無名の青年や、水没した谷中村に田中正造とともに最後まで踏みとどまった百姓たちに注ぐ著者の筆致の暖かさが、読者の私たちに伝わってくる。歴史から学ぶとはこのようなことなのだ。

およそ35年前、電信・電話という重要な分野で働く労働者の組合⇨全電通の組合員に向けて書かれた本論文は、いささかも古びることはない。日本の平和や民主主義、個の大切さという先人が追求した価値に、現在を生きる私たちは何度でも思いを深め、この価値を大事にしなければならぬと改めて思うのである。

おちあいよしあき（編集者）

